

# 再生産論の確立過程の研究

——再生産論の三草稿および叙述プランの成立に関する考察——

水 谷 謙 治

はしがき

第一節 再生産論の初稿の検討

第二節 再生産論第二稿と第八稿について

第三節 第二部第三章プランの成立について  
むすび

はしがき

『資本論』第二部（資本の流通過程）用の草稿には、多少ともまとまった八つの草稿とごく短かな五つの断片とがある。<sup>（一）</sup>この八つの草稿中、全体（三つの章）をまとめて扱っているのは第一稿と第二稿だけであり、第三章の再生産

再生産論の確立過程の研究

論を扱っているのは第一稿・第二稿・第八稿である。

第一稿は一九七四年にロシア語版『マル・エン全集』第四九巻で初公開された。第二稿第三章の未公開部分は、これも同じロシア語版の『全集』第五〇巻で初公開された。第八稿の主たる未公開部分は、大谷禎之介氏の調査で明らかになった。

そこで、これらの諸草稿を比較検討することによって、マルクスが明らかにしようとした再生産論の内容および再生産論の確立について若干の考察をしてみよう。

以下で利用する現行版『資本論』第一部と第三部（“Werke” Band 23-25, Dietz, 1963）を、記号KIⅠⅢで表示することにする。また、いわゆる「新メガ」（Marx/Engels Gesamtausgabe）のうちここで利用するのは、もっぱら一八六一～三年の二三冊ノットに関する第二部第三巻第一～第五分冊である。それらには通しページがうたれているので、ここからの引用では記号MG $\frac{3}{1}$ Ⅰ $\frac{3}{5}$ という略号を用い（たとえば $\frac{3}{1}$ は第三巻第一分冊）、ページ数を漢数字だけで示すことにしたい。

## 第一節 再生産論の初稿の検討

### 一

第二部用の原稿第一稿の第三章が再生産論の初稿である。それは、「現在の区分での第二部の最初の独立した、しかし多少とも断片的な論述である」（エンゲルス、第二部への序言）。それは最初のまとまった草稿であるのに、エンゲルスの編集では現行版にまったく利用されなかった。また、その公開は一〇年ほどまえにやっとなされたばかりである。

この初稿の執筆時期は、一八六四年とみてはばまちがない（後述）。

初稿の表題と構成はつぎのようになっている\*。

\* 上段の算用数字はマルクスがつけたもの。下段の数字は邦訳にしたがった内容上の節区分である。括弧「」の題目は邦訳によるものだが、この点については邦訳の注が付されているので参照されたい。なお、この邦訳はドイツ語解説文（ソ連M・L研による）にもとづくものであり、第三章（再生産論）は大谷楨之介氏の担当になっている。中峯照悦・大谷楨之介他訳『資本の流通過程』（大月書店刊、一九八二年）。右の解説文は入手できないし、同氏の正確な訳出力はよく知られている。そこで、本稿では同訳によって考察を行う。ただし、ロシア語版第四九巻に収載されている初稿も参照してある。

- 1) ①資本と資本との交換、資本と収入との交換、および不変資本の再生産。
- 2) ②収入と資本。収入と収入。資本と資本。（それらのあいだの交換）
- ③ 「再生産過程における固定資本の役割」
- ④ 「再生産の弾力性」
- 3) ⑤蓄積、すなわち、拡大された規模での再生産
- 4) ⑥蓄積を媒介する貨幣流通
- 5) ⑦再生産過程の並行、段階的連続、上向的進行、循環
- 6) ⑧必要労働と剰余労働（剰余生産物）
- 7) ⑨再生産過程の攪乱（表題のみ）

つぎに課題と対象についてみてみよう。

「資本の総流通過程」再生産過程のこれまでの考察では、われわれはこの過程が経過する諸契機あるいは諸局面を、ただ形態的に考察してきただけであった。これにたいして、今度はわれわれは、この経過が進行しうるための実体的な諸条件を研究しなければならない」（訳二〇〇頁）。

第三章では、蓄積をふくむ「実体的な再生産……に必要な使用価値が再生産され、かつ相互に条件づけあう、そのしかた」、「流通過程によって媒介されたものとして表現される、不変資本、可変資本、剰余価値の関係」を考察する（訳九〜一〇頁）。

この第三章では、どの諸商品も、「まずは資本の生産物として、それゆえまた商品資本として存在する」。だから、収入や不変資本を形成する商品資本の諸交換が行われねばならない。「こうした交換の実体的諸条件を研究することがわれわれの今度の仕事なのである」（訳二〇二頁）。

流通過程では、「もっぱら資本一般を代表する特殊の一資本だけにかかわりをもつ」が、「現実の再生産過程の考察では……個別的一資本ではなくて社会の総資本をその運動において考察しなければならない……」（訳二四九頁）。前二章とちがって「個人的消費は総再生産過程の一契機をなすもの」として考察すべきである（訳二〇二〜三頁）。

前提条件としてはつぎの点が示されている。資本の回転は年一回、固定資本の磨損分に入らない部分の捨象。生産力は不変。外国貿易の除外。資本家は全剰余価値の取得者とする。価値とおりの交換。

つぎに各節の要点をみていこう。

「第一節 資本と資本との交換、資本と収入との交換、および不変資本の再生産」

この節は、分量上で全体の約六割をしめており、内容上でも第三章の中心になる節である。中味は三つに区別でき

る。(イ) 第三章の課題と前提。(ロ) 総商品資本の素材的価値的変換と貨幣流通による媒介。(ハ) この問題に関するスミスらの批判と総生産過程における困難(難問)について。

(イ) についてはいま見たとおりである。(ロ) は、二大部門における商品資本の価値と素材の補填関係<sup>\*</sup>、および貨幣流通によるその媒介を明らかにしている。この論述を内容からみる限り、ここで初めて獲得された点があるとはいえない。

\* 補填関係の例解に使われている数字をかりに表式的に示してみよう。そうすると、それは第二稿の主要表式(オリジナル)と同じものとなる。

部門A (生産手段)  $400C + 100V + 100m = 600$

部門B (生産手段)  $800C + 200V + 200m = 1200$

\* \* 冒頭で、この考察のために「貨幣流通(および貨幣資本としての形態にある資本)を捨象する」とのべられているが、実際には一緒に考察されている。そして考察のあとで、「最終的な叙述では、この第一節を、(1)総再生産過程における商品資本、現実的素材変換、この素材変換を媒介する貨幣流通、という二つの部分に分離したほうがよいであろう。いまそうなっているように、貨幣流通を考へに入れることは、たえず展開の脈絡を破ることになるからだ」(訳二二頁)と記述されている。(ハ)についても、新たな論点が獲得されているとはいえない。ただ、「再生産過程における実体的な素材変換の分析が正しくされない場合に生ずる諸困難」(訳三〇頁)が概括されている点は注目に値する。

\* この困難とスミス流の循環論的な解決方法(訳三一一～六頁)については、ノート第七冊「原二八六頁」にみられる論述が数字をふくめてそのまま利用されている。ページの「原」はマルクスによるページ付を示す。

「第二節 収入と資本。収入と収入。資本と資本。(それらのあいだの交換)」

右の諸交換は、全商品資本の各部分の補填によって規定され、特徴づけられたものである。収入と資本との区別を

当面の見地からみると、それは総商品資本・総生産物の種々の構成部分・がその諸機能を果しうる配分比率をも表現している。この第二節はわずか一ページ分にすぎず、右の点をその要点にしているといつてよい。

3) (無題) として、固定資本——現物で機能をつづけ価値として再生産と流通に入らない固定資本——の大きさを規定する事情や、この固定資本部分の増大傾向などを扱う部分がある。だが、これは「資本の回転を扱う第二章に含めるほうがいい」とのべられている。

#### 「再生産の弾力性」(邦訳第四節)

再生産の規模は、蓄積によらなくても固定資本や科学の利用、労働力の熟練等の発展によって可変的だという点を明らかにしている。この点は第二稿で前貸貨幣資本との関連で論及されることになる(現行版、第一章第二節「貨幣資本の役割」)。なお、再生産過程の弾力性に関する論及はノート第一八冊と第二二冊にみられる(ノート18「原一一五〇〜一二一」MG<sup>3/4</sup>一八七六〜七。ノート22「原一二七七〜八」、MG<sup>3/4</sup>二二五二〜四)。

#### 「第三節 蓄積すなわち拡大された規模での再生産」(訳第五節)

この節の課題は、「剰余価値の資本への再転化の**実体的諸条件**」を説明することである。要するに、剰余価値の一部分は必要生活手段の形態で補填されねばならず、収入として資本家と労働者によって消費される。剰余価値の他の一部分は生産手段の姿で補填され、不変資本として産業的に消費される。その補填は資本家間の交換によってか、または現物の自己補填によって直接に行われる。

こうした把握はノート第二二冊でみたそれと同じであり、右ノートの把握(原一三八二〜三、二二五九〜二二六一)を簡単化したものといつてよい。

なお、本節の最終部分におけるつぎの叙述は、単純再生産から拡大再生産への基礎的な移行条件を認識するうえで注目に値する。

「……追加資本が古い作業機械や道具をもってしては生産物に転化されえないで、はじめにまず追加固定資本を創り出す必要がある場合には、この追加資本の一部分はまず第一に、古い固定資本・機械を製作する機械・等々が生産要素として入りうる生産諸部門に投入されるのである」(訳二七二頁)。

#### 「第四節 蓄積を媒介する貨幣流通」(訳第六節)

この節の核心は、蓄積のさいに生ずる貨幣材料(金)の増加分の補填が金生産部門と他の諸部門との交換によって行われる、ということである。

蓄積のさいの貨幣蓄積——有価証券や貨幣の蓄蔵——の問題は、利子生み資本の考察に属すると記述されている。

#### 「第五節 再生産過程の並行、段階的連続、上向的進行、循環」(訳第七節)

この節の前半では、右の題目に関する一般的諸事実が示されている。そうした点は以前の研究でえられたことの確認とみてよい。

ところで、こうしたことの確認は再生産論にとっては前提である。再生産論は、これらの一般的事実を総商品資本の価値と素材の補填として研究するのであって、この題目の問題自体を独自の対象として究明する必要はない。実際に第二稿では、この問題は第三章から除かれ、一部分が循環の視角から第一章で扱われることになる。

後半は「再生産における資本の実体的変態」を扱っている。資本が再生産されるばあい、現物形態は可変的でありうることを明らかにするのである。この点も、ノート第二二冊の「再生産における資本の実体的変態」(MG同・一三

七七―八）の把握がそのまま生かされている。\*

\* たとえば、本節の一四四ページ（訳二八一―二頁）の叙述は、第二二冊の一三七七ページ（MG二二五一―二）と照応している。

#### 「第六節 必要労働と剰余労働（剰余生産物）」（訳第八節）

右の諸要因が社会的再生産の観点から考察されている。総生産物のうち、必要労働部分は労働者の必需品として現われ、剰余労働部分は資本家にとっては奢侈品と蓄積ファンドとして現われる。必需品とその不変資本をつくる労働者の労働は、社会的にみると全労働者階級プラス資本家階級の維持に必要な労働＝総生産物として現われる。全社会の再生産過程の考察では、必要労働と剰余労働を二度計算に入れてはならない。

この節の後半では、剰余生産物の消費様式という面から、資本家的蓄積の特質と古典派経済学者たちによるその理解の特徴が明らかにされている。

#### 「第七節 再生産過程の攪乱」

これは表題だけである。ノート第二二冊にある該当問題の論述と初稿第一章の該当部分（訳五一頁）からみれば、蓄積における生産物の役割の変化や対外貿易や価値変動等を通じて、二部門間に配分される総資本の比率が攪乱されること（恐慌の可能性の発展）をのべようとしたものであろう。ただし、「これは第三部第七章で考察すべきである」と記されている（訳二九四頁）。

この初稿で初めて、社会的総資本の再生産の研究に「再生産と流通」という表題と各節題（構成）とが与えられた。このことを別とすれば、本初稿の主要な特徴はつぎの点にある。

そのひとつは、課題と対象あるいはその位置づけをつぎの点で従来よりも明確にしていることである。

- ① 第一、第二章が流通過程の単なる形態的考察であるのに対して、第三章はその実体的な諸条件・総商品資本の価値と素材の補填関係・を分析する。② 前二章では資本一般の代表として特定の個別資本を扱ったが、第三章では社会的な総資本の運動——資本と収入の流通、生産的消費と個人的消費、それら全体の諸関連——を扱わねばならない。
- ③ 対象は総商品資本の再生産である。

これらの点は、今までにも断片的に、あるいは萌芽的に示されたことがあった。しかし、ここではそうした点が三つの章との関連で統一的に、しかもより明確に示されている。

二番目の特徴は、再生産過程の分析中に生ずる諸困難を概括していることである。不変資本部分の補填、純収入と総収入および純所得と総所得等の区別、資本と収入との関係、これらの問題の誤った理解（スミスその他）等々、そうした点が再生産論上の主要な難問という視角から明らかにされ、概括されている。

こうした概括は、マルクスが考えていた再生産論の核心を浮き彫りにしたものとして注目に価する。また、それは第三部第七篇「収入とその諸源泉」における再生産過程の分析の根幹になるものである。

三番目の特徴は、再生産論で扱う貨幣流通の問題をつぎのように明確化したことである。再生産論では「素材変換

を媒介する貨幣流通」の態様、および「貨幣流通の特殊的規定が現実的再生産過程の契機として生じてくる場合」（訳二〇一頁）を扱う。第三部（最終章）では、貨幣の還流運動・貨幣材料の補填・還流運動における貨幣のより進んだ諸規定等を明らかにする（訳二四頁）。ちなみに、ノート第一七冊や第二二冊では、再生産を媒介する貨幣流通は出発点への還流運動（主として第三部に属する）という視角から扱われていた。

つぎに、現行版と比較しながらその特徴を追加しておこう。

第一。のちに再生産論から除外される諸問題を混入させている。たとえば、再生産過程に価値として入らない固定資本の問題（現行版では第二篇）がそうである。再生産過程の並行性、同時性の問題もそうである。

第二。再生産過程を媒介する貨幣流通の諸問題のうち、種々の収入形態を通じて行われる貨幣の還流運動の考察を除外している。この還流運動で貨幣がうけとる詳細な諸規定や剰余価値を実現する貨幣の由来の問題は、第三部最終章に属するものとされている。他方、再生産論では素材変換を媒介する貨幣流通の態様と、そのさい貨幣流通がうけとる特定の規定を扱うといわれている。以上のことは、貨幣材料の再生産の問題がまだ再生産論の一環に組み込まれていないことを意味する。

第三。蓄積Ⅱ拡大再生産の考察について。その基礎は単純再生産における生産諸要素の機能的配置の変更にあるという考察がみられない。さらに、拡大再生産を始めるさいの貨幣資本の蓄積に関する考察もみられない。

第四。「対象についての従来までの叙述」、および固定資本の補填様式に関する諸部分が欠如している。

第五。分析対象を社会的総商品資本の運動と規定しているが、三循環形式のうちの商品資本の循環（ $W' - W'$ ）と明示するまでにはいたっていない。この点は、初稿第一章の循環形式の分析が過渡的であり、四循環形式で行われて

いることを反映している。

第六。再生産表式が未発見であり、利用されていない。

第七。「第一節 資本と資本との交換、資本と収入との交換……」、「第二節 収入と資本。収入と収入。資本と資本……」にみられるように、問題の究明が最初から諸収入の運動と結びつけて行われている。いいかえれば、収入形態を除外して実体的な補填関係を明らかにし、あとでその観点をに入れて論ずるというかたちをとっていない。このことは、この時点ではまだ第三部「収入とその諸源泉」で収入形態という視角から再生産過程の主要な問題に立ち帰るというプランが明確になっていないことをも意味している。

以上、これまでの考察全体をみれば、本初稿の過渡的性格が瞭然になる。それは、第二稿よりもむしろノート第二冊の当該研究に近いもの、といえるであろう。

(1) エンゲルス第二部への序言。くわしくは大谷禎之介「資本論第3部第1稿について」(『経済志林』第五〇巻第二号、九四〇九五、一三九、一五一〜二ページ)を参照されたい。

(2) 大谷禎之介「『蓄積と拡大生産』(資本論第2部第21章)の草稿について」(上)(下)『経済志林』第四九巻第一号、第二号。

## 第二節 再生産論第二稿と第八稿について

### 一

二つ折り版二〇二ページからなる『資本論』第二部用の第二草稿は、一八六八年の終りから一八七〇年中頃までの再生産論の確立過程の研究

あいだに執筆されたと推定されている。<sup>(1)</sup>同草稿の第三章「流通過程と再生産過程の現実的諸条件」には、七二ページ「原一三〇～二〇二」がさかれている。

エンゲルスの編集による現行版（再生産論）は、右の第二稿と第八稿とから構成されている。現行版で双方の占める割合は、およそ $\frac{1}{4}$ と $\frac{3}{4}$ である。また、第二稿第三章のうち、現行版に直接利用されているページは全体の約三割程度である。しかし、現行版に対する内容上の比重はこうした量的比率からは判断できない。第八稿のかんりの部分は第二稿を土台とし、それを骨格としているからである。第二稿は第八稿とともに現行再生産論の確立にとって第一級の意義をもっているといわねばならない。<sup>\*</sup>

\* 第二稿のオリジナルは、最近（一九八一年）まで未公開であった。ただし、わたくしは一九七七年にソ連のM・L研究所でこの未公開部分（解説文）を調査したことがある。その概説は名和隆夫氏によって明らかにされている（水谷・名和「資本論第二部」第二草稿Vの未公開部分について、『立教経済学研究』第三三巻第一号）。

ロシア語版『マル・エン全集』第五〇巻で公開された原草稿によりながら、第二稿第三章の全体を概括してみよう。まず、草稿第一ページのまえにおかれた第三章の目次はつぎのようになっている（各項目のページ付が行われている点からみると、この目次は第三章の執筆中に書かれたものと思われる。蓄積と拡大再生産の項目は実現されていない。括弧内の数字はロシア語版に掲載されているマルクスのページ付である）。

「第三章 流通過程と再生産過程の現実的諸条件」

1) 社会的に考察された可変資本、不変資本、剰余価値（二三〇～二四二）

A 単純再生産（二四二）

a) 貨幣流通の媒介なしの叙述 (一四二～一五八)

b) 貨幣流通の媒介を入れた叙述

B 拡大された規模での再生産、蓄積

a) 貨幣流通なしの叙述

b) 貨幣流通の媒介を入れた叙述

2) (空白)。

第三章の叙述のなかで、マルクスはところどころに大小の表題を記述している。だが、そのうちには叙述内容の全体を表現していないものもある。ロシア語版の編集者による目次も同様である。そこで、第三章の全体像を明らかにするために、原草稿の内容とマルクスのつけた表題および現行版の目次等を参考にしながら、叙述内容のそれぞれの部分に適當だと思われる表題をつけてみよう。<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup> 「〔内は現行版で利用されていないことを示す。ただし、利用されているページでもその一部分である場合が多い。丸括弧内の数字は既述のとおりだが、「現行版」としてその下に示す数字は、第二稿の該当部分を利用している現行版『資本論』のページ数である。かぎ括弧「」は原文を示す。ゴシック体および(Ⅰ)～(Ⅲ)は構成上の区分をわかりやすくするために筆者がつけたものである。

### 「第三章 流通過程と再生産過程の現实的諸条件」

#### 緒論

研究の対象と位置 (一三〇～一、現行版三五一～四)

貨幣資本の役割 (社会的総資本の構成部分としての貨幣資本) (一三一～三、現行版三五四～八)

再生産論の確立過程の研究

「スミスの「分解論」」（一三四～七）

「不変資本・可変資本・剰余価値の社会的流通」／「個別のかつ社会的に考察された生産物価値の構成諸部分」（一三四）

スミスと彼以降の人々（一三四～一四一、現行版三八八～三九〇）。

「不変な規模での再生産」「貨幣流通なしの論述」（一四二）

問題の提起と二部門分割、貨幣流通の取扱ひ（一四二、現行版三九一～三九六）。

「消費手段の生産」（一四三、現行版三九六～七）。

「生産手段の生産」（部門1の不変資本、一四四～六、現行版四二〇～二）。

両部門の可変資本と剰余価値（一四七～九、現行版四二三～七）。

両部門の不変資本（一五〇～一、現行版四二七～四三二）

スミス、シュトルヒ、ラムジーへの回顧（一五二～三、現行版四三二～五）

「総生産物の価値諸成分、その均衡性と表式の意義」（一五四～八）

「貨幣流通の媒介を入れた論述」（一五九）

（I）剰余価値や総商品W'を実現させる貨幣について（一五九～一六〇、現行版四七〇～四）

「貨幣流通を媒介とした再生産過程、スミスの誤謬」（一六一～三）

トラシの謬論（一六四～七、現行版四七六～四八四）

（II）「生活必需品と奢侈品とへの消費手段の細分割、その再生産と貨幣流通」（一六七～一七二）

〔各種の部分流通における貨幣の還流運動と貨幣の機能〕（一七二～一八三）

（Ⅲ）〔VとMの比率が不等な場合の再生産と貨幣流通〕（一八三～一九五）

〔労賃が剰余価値より大きい場合〕（一八三）

〔労賃が剰余価値より小さい場合〕（一九〇）

〔表式上の仮定（比率）は法則と矛盾しないか〕（一九五～七）

〔Vとm、細部門等の比率を変えた場合の再生産（種々の表式例の計算）〕（一九七～二〇二）

以上の叙述内容にみられるように、再生産論第二稿は緒論、貨幣流通なしの考察、貨幣流通を入れた考察の三つに大別できる。さらに、貨幣流通を入れた考察部分は内容的にみて、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに区分できる。Ⅰは、剰余価値を實現する貨幣の出所とその負担者、貨幣流通による再生産の媒介の態様、この問題に関する謬見の批判等を内容としている。ⅡとⅢは、現行版では直接には利用されていないので、もう少し詳しくみておこう。

## Ⅱ 亜部門分割。種々の部分流通と貨幣の諸還流（一六七～一八三）

いままでの単純な運動形態から、より複雑な形態に移る。まず、消費手段を労働者の生活必需品（a）と資家用の奢侈品（b）とに分け、生産手段も右のaとbをつくる生産手段 $\alpha$ と $\beta$ とに区分する。生産部門もⅠをⅠaとⅠbに、ⅡをⅡa・Ⅱaa・Ⅱb・Ⅱbbとに細分割する。その表式例はつぎのとおり。

$$\begin{array}{l} C_a^{200} + C_a^{50} + M_a^{50} \\ \text{I} \\ C_b^{200} + V_b^{50} + M_b^{50} \end{array}$$

再生産論の確立過程の研究

$$C_{\alpha}^{200} + V_{\alpha}^{50} + M_{\alpha}^{50} + C_{\alpha\alpha}^{200} + V_{\alpha\alpha}^{50} + M_{\alpha\alpha}^{50}$$

II

$$C_{\beta}^{200} + V_{\beta}^{50} + M_{\beta}^{50} + C_{\beta\beta}^{200} + V_{\beta\beta}^{50} + M_{\beta\beta}^{50}$$

各部門の種々の流通——部門Ⅰ・Ⅱにおける資本家と労働者間の、また資本家間の諸交換Ⅱ各々のC・V・mを表わす貨幣の出発点への還流——を八つに区分してとらえていく。

こうした考察を通じて彼が明らかにしようとしたことは、つぎの四点に要約できる。

a、可変資本として投下された貨幣の直接的還流と間接的還流。可変資本として投下された貨幣は、労働者の賃銀収入の支出を通じて資本家に還流する。生活必需品部門では、その労働者に投下された可変資本（G）は、彼らの賃銀による必需品の購入を通じてこの部門の資本家に直接に還流する。しかし、生産物が必需品でなくなるほど、貨幣の還流は間接的になってゆく。

b、資本の運動における貨幣還流と、収入支出を通じての貨幣還流との区別。前者は最初から価値増殖を目的とし、出発点よりも多額の貨幣還流がある。後者はそうではない。産業資本家は、剰余価値の実現に必要な貨幣をその実現を予想して最初に流通に投下する。そのことを彼は、消費手段の購入に貨幣を支出するというかたちで行うのである。その貨幣は彼の種々な仲間たちに配分されていき、仲間たちによる彼の商品購入を通じて彼（産業資本家）のもとへ還流する（そのばあいには、彼が流通へ前貸した貨幣額が還流するだけである）。

c、同じ貨幣が資本家の手中では資本（可変資本）として機能し、労働者の手中では収入となり、購買手段として機能する。賃銀と剰余価値に前貸された貨幣は不変資本の流通でも役立つが、それは両部門の交換（ⅠCとⅡのVプ

ラスム）が行われる限りにおいてだけである。

d、流通する価値の総額は、 $V$ と $m$ とに前貸される部分と資本家間で流通するC部分とからなっている。消費段手の消費にあてられる貨幣総額が全生産物の流通に役立つという見解は誤っている。労賃支払に投下された貨幣は、 $V$ や $m$ の流通手段として機能するが、C部分の相互交換はこうした貨幣とはまったく係りない貨幣大量によって媒介される。

### Ⅲ 可変資本と剰余価値の比率が不等な場合の再生産と貨幣流通（二八三—二〇二）

いままでは、生活必需品は労働者だけが消費し、奢侈品は資本家だけが消費するものとした（すなわち、 $Ia \parallel$ 総 $V$ 、 $Ib \parallel$ 総 $m$ と仮定した）。また、表式上では $V$ と $m$ の大きさを同等と前提してきた。しかし、実際にありえないこうした前提は、発見された法則と矛盾しないだろうか？　そこで、以上の前提を変化させた場合を検討してみる。賃銀が剰余価値より大きい場合。剰余価値の流通手段が今度は賃銀の流通手段になり、より多くの貨幣が可変資本のために必要になる。そこで事態はつぎようになる。

$Ia$ 労働者の消費需要の増加 →  $Ia$ への資本と労働力の移動。逆に、 $Ib$ 資本家の消費需要の減少 →  $Ib$ での商品過剰と利潤の減少 →  $Ib$ 労働者の解雇と賃銀低下 →  $Ib$ 労働者の $a$ への消費需要の減少。

こうした運動は、最初の過程（ $< \sqrt{E}$ ）の実現を阻止する資本家的機構の内在的反作用にほかならない。

賃銀が剰余価値より小さい場合。この場合はさきほどとは逆の変化が生ずる。労働元本は労働力の価値以下に低下させられうる。労働元本の大きさを不変とみるのは、従来までの経済学のドグマである。

つぎに、両部門とその細部門における可変資本と不変資本の大きさの比率をさまざまに変化させ、その表式計算を

行う。双方の大きさが、同等、 $m$ が $V$ より大、 $m$ が $V$ より小の三ケースのうち、資本主義の基礎上では第二のケースだけが現実的である。

## 二

以上で第二稿第三章の要点を明らかにしたので、その特徴を初稿と比較しながら示してみよう。

一、初稿では、対象規定と位置づけは各所でごく断片的に記述されていたが、第二稿では冒頭でまとめて明らかにされている。それは、八つの草稿中でも唯一のまとまった論述である。ここで初めて、三つの章（篇）の関連が再生産論の視角から包括的に示されたといつてよい。

さらに、三循環形式のうち、商品資本の循環  $W' - W'$  が分析対象と規定されている（一四二）。この点でも、循環論との関連が明らかにされた。

二、初稿では、価値補填と素材補填は収入の運動と一緒にとらえられていた。ちなみに、初稿の第一節と第二節の表題は、「資本と資本との交換、資本と収入との交換、不変資本の再生産」、「収入と資本。収入と収入。資本と資本（それらの交換）」となっていた。だが、第二稿では、さしあたり前者が収入形態を捨象して純粹に解明されている。このことは、実際の分析が始められる最初の表題——「a) 不変資本・可変資本・剰余価値の社会的流通」にも示されている。こうした点は、第三部「収入とその諸源泉」で、再生産の問題が収入の観点から再論されるようになっていふことに一因があるといつてよい。

三、初稿では、貨幣の還流運動や剰余価値を実現させる貨幣の問題は、再生産論ではなく第三部の末章に予定さ

れていた。しかし、第二稿では、これらの問題が——特に還流運動については第八稿以上に——詳細に扱われている（ただし、貨幣材料の再生産の解明はほとんど存在しない）。

四、第二稿では、「社会的総資本の構成部分としての貨幣資本」の意義が、個別資本の循環と回転における意義との関連で明らかにされている（現行版、緒論第二節「貨幣資本の役割」）。

個別資本の運動では、貨幣資本は第一に、運動の出発点・起動力として把握された。それは第二に、生産資本の連続的回転を維持するために流通過程へ追加投資されねばならない資本部分としてとらえられた。社会的再生産では、貨幣資本は社会的総資本の構成要素と規定され、この観点から右の二重の意義が新たに規定されたのである。第一の意義はここでもあてはまる。ただし、ここでは、生産資本に転化する貨幣資本の大きさと再生産の弾力性との関係に注意が払われている（初稿では、再生産過程の弾力性は独立した節でそれ自体として扱っていたが、第二稿では貨幣資本の特徴との関連で扱れるようになった）。第二の意義は、ここでは、総商品資本の補填を媒介する流通手段・資本家階級が自分の商品を実現するのに負担し前貸すべき社会的空費・としてとらえられる。

五、第二稿では、消費手段部門が生活必需品と奢侈品の二部門に区分され、それに応じて生産手段部門も二分劃——さらにそれらが二つずつに再細分劃——される。そして、八つの部分流通・貨幣還流が研究されている。また、可変資本と剰余価値の大きさの比率を変化させ、その諸表式の計算を行っている。こうした扱いは初稿や第八稿にみられない点である。

六、蓄積と拡大再生産の論述は、表題中に予定されながら実際には行われていない。

七、表題にみられるように、単純と拡大のどちらの再生産でも、貨幣流通の除く節と入れた節との叙述構成になっ

ている。これは、初稿でみた指示——最終的な叙述では、素材補填と貨幣流通によるその媒介とを分離した方がよい——を実現したものである。だが、そのことが機械的に行われたため、再生産の実体的諸条件については重複した叙述になっている。

八、再生産表式が『資本論』の第二部で最初に利用されたのは、第二稿である。また、第二稿でも部門Ⅰは消費手段、部門Ⅱは生産手段とされている。

### 三

第八稿に移ろう。

第八稿は再生産論最後の、また資本論草稿中でも最後の草稿である。執筆時期は一八八〇—八一年と推定されている。<sup>(2)</sup>

ここでは、現行版に利用されている第八稿と既述した大谷楨之介氏による綿密なオリジナル調査とによりながら、第八稿のおもだった特徴について考察する。

一、一般的な特徴。第八稿は、エンゲルスによって文章上で多少の修正が加えられているものの、文字通りそのほとんどが現行版に利用されている。表題はほとんどなく、現行版のそれはすべてエンゲルスによるものである（現行版では第八稿が支柱とされ、第二稿が補足的に組みこまれるかたちになっており、第八稿の各部分は多少とも組み替えられている<sup>(3)</sup>）。それは清書用原稿ではなく、ごく準備的なものである。その眼目は、「第二稿にくらべて新たにえられた諸観点を確立し展開することであって、新たにいう必要のなかった諸点は顧慮されていない」（エンゲルス、第二

部への序言)。たとえば、緒論の第一節と第二節部分が第八稿にないのはこのためであろう。

二、貨幣流通の取扱いの改善。第二稿での取扱いについては既述したとおりである（前ページ特徴七）。あらためてこの点をエンゲルスの言葉で示そう。

「第二稿では、まず再生産がそれを媒介する貨幣流通を顧慮することなく取扱われ、つぎにこれを顧慮してもう一度取扱われていた。このようなことをなくして、一般にこの著者の拡大された視野に対応するように書き直すことが必要だった」（第二部への序言）。

ところで、貨幣はそれ自体としては、総生産物の補填に入らないでそれを媒介するにすぎない。したがって、右の実体的な補填関係自体をその基本で把握しようとする場合には、さしあたり貨幣流通を捨象しておき、あとで考察した方がよい。このことは第一稿でも第二稿でも明示されていた（初稿訳二〇一、二二三頁。第二稿一四二頁）。では、右のエンゲルスの指摘や第八稿での貨幣流通の叙述形式は、第一・二稿でのマルクスの見解が誤っていたことを示すだろうか？ マルクスは右の見解を第八稿で撤回したのだろうか？

そのようには決して考えられない。第八稿でも、「貨幣はそれ自体としては現実の再生産の要素ではない」（KⅡ、四八六）、貨幣流通は生産物補填を媒介するとともに現実的再生産の理解を困難にする、という見地は堅持されている。「自然的再生産過程の一見して明らかな諸条件は、経済的再生産過程の諸条件をも明らかにするのであって、ただ流通の手法によってひき起されるにすぎない思考の混乱を取り除くのである」（同三五九）。

この見解からは、総生産物の基本的補填関係いわゆる三大支点自体を示すには貨幣流通を除外した方がよい、ということになる。ただし、基本関係を示したあとでは、すぐに貨幣流通を入れて展開しないと重複をまねくことになる。

る。事実、現行版はまず三大支点を、「諸転換を媒介する貨幣流通をさしあたり考察しない」（KⅡ、三九六）で示し、その直後からそれを入れるという編集になっている。第二稿ではそうになっていない。貨幣流通を除外した場合とそうでない場合の両方で、生産物補填の内容が重複して扱われている。叙述形式についていえば、この点が改善されたのである。第八稿は、闘病中の痛ましい痕跡をもつ未整理な叙述である。改めて最終的な清書が健康なときに書かれてもしたならば、貨幣流通の問題は右の方向でより整理して扱われたであろう。

三、蓄積または拡大再生産の解明。第八稿では、第二稿で実現されなかった右の解明が行われている。初稿でも蓄積の解明はみられたが、それは主として基礎的条件としての剰余生産物と余剰労働者人口の存在、および蓄積時の基本的な補填関係の解明であった。それと比較してみると、第八稿では表式が利用され、新たに下記の点が解明されている。

第一に、単純再生産から拡大再生産への移行の条件、すなわち、部門間における生産諸要素の機能的比率・組合せの変化。第二に、部門間補填での貨幣資本の蓄積、その場合の諸困難。第三に、蓄積と金生産との関係。第四に、蓄積率の変化に伴う部門間補填—I（ $V+M$ ）=II C—における諸変化。

#### 四、固定資本の再生産。

#### 五、貨幣材料の再生産の表式的解明。

六、対象に関する従来の諸論述の充実。重農主義者への評価の追加、スミスの「ドグマ」に関する総合的な批判と評価。この部分の充実と拡大は学説史上の回顧のためではなく、再生産論の主題をスミスらとの関係であらかじめ明白にしておくために行われたと思われる。加えて、『資本論』にできるだけ多くを入れようという配慮——第四部の

実現は不可能だろうという予期——が働いていたかも知れない。

## 七、二部門の逆表示。

\* 第二稿から第八稿への発展関係に関する宮川彰氏の見解はかなり独特なものである（『マルクス再生産論の確立過程』△『経済と経済学』第五四号、一九八四年三月）。

氏は、第二稿のつぎの二叙述に重大な注意を払われる（氏による第二稿からの引用文は一部割愛してある。傍線の一部は水谷、他は宮川氏によるもの）。

①「可変資本価値が労働力の価値にひとしく直接に生活手段の形態で前貸しされるという前提のもとでは、可変資本は、……資本家が……労働力を購入した後には、たんに労働者の収入としてあらわれる」（前掲一五四）。

②ⅠⅤとⅡⅢとの取引。「……同一の取引自体が、Ⅱにとってはその収入の変態であり、Ⅰにとっては資本の変態である」（同一六三）。

氏によれば、こうしたマルクスの把握はスミスと同様に「可変資本を収入と同一視する誤り」（前掲八〇頁）で、「スミスのドグマ以外のなものでもない。くわしくいうと、ドグマを構成する二つの支柱の一つ、スミス古典派の資本—収入転化命題そのまゝの受容である」（同七九頁）。氏はこの誤りが第八稿で克服されるといわれるのである。

「だが第八稿は、これら命題をば批判の矢おもてにたせるのである。『可変資本はつねになんらかの形態で資本家の手にとどまるから、それがなんびとかのための収入に転化するとはけっしていえない。……労賃として受取られた貨幣が労働者の手でなしとげる転化は、可変資本の転化ではなく、貨幣に変えられたかれらの労働力の価値の転化である』△KⅡ△Ⅴと。仮借なき自己批判といわねばならない」（前掲八一頁）。

可変資本が労働者の収入になる、という表現はそれだけをとってみれば正しくない。しかし、基本的には正しい把握があつても、不正確な表現が残る場合がある。またあえて、不正確な表現を使う場合さえありうる。たとえば、労賃を労働力の価格と把握しているにもかかわらず、労働の価格とか資本と労働との交換と表現する場合がそうである（KⅠ五八四、『諸結果』四六七）。

氏の一連の叙述からすれば、第二稿当時のマルクスは、右の点で単なる不注意とか不正確な表現を残していたなどというこ

とにとまらなない。可変資本と収入との範疇的、同一視、貨幣機能と資本性格との取違え——それは資本物神にねざしている——という基本的誤りを「じつはマルクスがおかしている」（前掲八二頁）のである。

だが、第二稿といわず、それ以前の第二部初稿や第三部「収入とその諸源泉」でも、この点についての正しい把握がみられる。二、三の叙述例だけを示してみよう。

初稿第三章。「貨幣形態によって行われる媒介を度外視すれば、可変資本は実際には生活手段の形態で存在し、この生活手段が労働者階級の収入をなすのである。……可変資本そのものは、労賃・それゆえにまた労働者の収入・に転化するのではなく……」（前掲訳、二〇二頁、ゴチ水谷）。「可変資本は貨幣形態においてのみ前貸しされるのであって、……それがその素材的諸要素からみて消費に入るときには、それは可変資本としてではなくて、労働者が彼の収入を支出していく商品……として彼に相対しているのである」（同二三五頁）。

第三部第四九章では、一者にとって資本をなすものが他者にとっては収入をなすという文句が、スミスの分解論および価格構成論とともに全面的に批判されている。

第二稿。「貨幣は、初め貨幣資本として機能し、ついで労働者にとって流通手段として機能し、こうしてその出発点へ復帰する。／初め貨幣の姿で（可変）資本が前貸しされ、ついでその貨幣の姿で収入が支出される」（一二二）。この文章はスミスの水準を一步超えるものと氏も評価されている）。

以上にみられるとおり、可変資本と収入との根本的区别は、第二稿でもそれ以前でも明示されている。第八稿（現行版第一〇節「資本と収入、可変資本と労賃」）でより正確な把握が示され、その点で発展がみられるとしても、第二稿への氏の評価は行き過ぎといわざるをえない（第二稿と第八稿に関する氏の評価は、資本循環論その他いくつかの論点に及ぶものだが、紙数の都合で以上の点にとどめた）。

(一) ロシア語版『マル・エン全集』第五〇巻、編集部注1 (p. 523)

(二) この点はグリゴリヤンのつぎの論文に示されている。

С. М. Грийорьян, К Вопросу о Рукотисях II Тома "Капитала" К. Маркса, «Институт Марксизма-Ленинизма при ЦК КПСС, Научно-информационный бюллетень сектора произведений К. Маркса и Ф. Энгельса», Ио 19, 1970, стр. 171

### 第三節 第二部第三章プランの成立について

#### 一

全商品の再生産と流通に関する問題を流通過程の篇で扱うという最初の意図は、二三冊ノートの第六冊(一八六二年三月執筆)の冒頭、重農学派をとりあげたところで示唆されている。

重農学派は労働過程における資本の対象的諸成分を分析し、生産のブルジョア的形態を社会の生理学的形態として理解した。彼らはまた、「一般に、資本の流通過程と資本の再生産過程との関連を規定している。これについては流通に関する章で立ち返ることにしよう」(MG<sup>3/2</sup>、三三八)。

同ノートの後半では、スミスの分解論の批判<sup>II</sup>不変資本の再生産の研究が行われている。そこでも「不変資本の再生産に関する問題は、明らかに、資本の再生産過程または流通過程についての<sup>フッシュェット</sup>篇に属する」(同四〇)とのべられている。

以後、こうした構想は初稿に結実するまで一貫して保持されてゆく。

ただし、この時点では、再生産の問題も「資本一般<sup>II</sup>一つの資本」の枠組みで扱おうとする考えが残されている。全国における生産物補填と個別資本家の価値補填とは、「資本の流通過程のところ、個々の資本そのものについて考察されねばならない」(同三七九)という叙述がそのことを示していると思われる。

ノート第三冊（一八六二年八月）では、リカードの蓄積論を扱ったところでつぎのようにのべられている。

「われわれは、完成した資本—資本と利潤—を説明するよりも前に、流通過程すなわち再生産過程を説明しなければならぬ。なぜならば、われわれは、資本がどのように生産をするかということだけでなく、資本がどのように生産されるかということをも説明しなければならないからである」（MG<sup>3</sup>/<sub>5</sub>、一一三四）。

なお、ここでは再生産過程の考察に蓄積過程をふくめる意図とともに、恐慌の発展した可能性を再生産過程の攪乱として流通過程篇で論ずる意図が示されている（同一二三—四、一一三八—九）。

ノート第五冊（一八六二年一〇—十一月）になると、流通過程における資本の形式的変態と再生産を表わす実体的変態との区別とともに、流通における資本の三姿態と三つの循環形式の把握がみられるようになる（MG<sup>3</sup>/<sub>4</sub>、一四五六、一四七九—一四八〇）。

この時点になると、実体的再生産の考察は、「単に孤立した行為や局限された範囲においてではなく、過程の流れとその諸条件の広さ」からみた考察、あるいは「単にいろいろな段階を経る循環であるだけでなく、……すべての段階における商品の並行的生産」の分析としても示される（同二四一七）。社会的再生産の諸条件の考察が、「総再生産過程の考察」と規定されるのもこの第一五冊においてである（同二五九三）。

一八六三年一月に、彼は『資本論』第一部と第三部のプラン草案をノート第一八冊に挿入した。

#### 第一篇 資本の生産過程

##### 一、序説。商品。貨幣。

##### 二、貨幣の資本への転化。

三、絶対的剰余価値。……。

四、相対的剰余価値。……。

五、絶対的剰余価値と相対的剰余価値との結合。賃労働と剰余価値との諸關係（比率）。資本のもとへの労働の形式的および実質的包摂……。

六、剰余価値の資本への再転化。本源的蓄積。ウェークフィールドの植民理論。

七、生産過程の結果。

（第六章が第七章で取得法則の現象における転変を説明することができる。）

八、剰余価値に関する諸学説。

九、生産的および不生産的労働に関する諸学説。（同一八六一〜二）。

### 第三篇 資本と利潤

一、剰余価値の利潤への転化。

二、利潤の平均利潤への転化。

三、利潤と生産価格に関するスミスとリカードの学説。

四、地代（価値と生産価格との相違の例証）。

五、いわゆるリカード地代法則の歴史。

六、利潤率低下の法則の歴史。スミス、リカード、ケアリ。

七、利潤に関する諸学説。……。

八、産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。

九、収入とその諸源泉。……。

一〇、資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動。

一一、俗流経済学。

一二、むすび。資本と賃労働。（同二八六一）。

右のプランでは、第二篇資本の流通過程に関するプランは記述されていない。多分、第一篇や第三篇にくらべてその内容構成のプランが十分に固まっていなかったからであろう。しかし、第二篇の内容を三つに区分して扱うという構想は、当時ほぼ固っていたとみてよさそうである。その理由はつぎの諸点である。

（イ）五九年当時の流通過程の叙述プランでは、内容上で現行の第一、二篇に該当する多数の項目があること。

（ロ）資本の流通過程を、単なる形式的変態と実体的変態の両面で分析しなければならない、という見解がすでに示されていること。

（ハ）流通過程では資本は商品資本・貨幣資本・生産資本の諸形態を着脱しつつ運動し、それぞれの循環形式をとる。生産資本の流通形式から固定資本と流動資本の区別が生ずる。こうした把握があったこと。

（ニ）固定資本と流動資本の独自の流通様式、価値増殖に及ぼす回転期間の作用等が明らかにされていること。

（ホ）流通の実体的変態の分析は、年間総生産物の価値と素材の補填に関する諸条件の分析であり、単純再生産と拡大再生産とで究明される。それは総再生産過程の考察である。そして、循環形式の問題を別にすれば、この問題はノート各所で（合計すれば）大きなスペースをさいて考察されていること。

以上の諸点からみて、流通過程篇の三区分のプランは当時ほぼ固っていたといえそうである。他方、第三篇(部)第一〇章では、「総過程における貨幣の還流運動」が構想されている。それは、右プランの直前にかかれた「エピソード、再生産過程における貨幣の還流運動」を柱とするものと考えられる。その主要内容は、社会的再生産における流通手段の供給源泉と供給者およびその供給様式に関するもの、再生産における貨幣の還流様式(諸収入の運動との関係)とそのさいの貨幣の諸規定、貨幣の還流という視角からみた諸資本との区別、および以上の諸問題に関する誤った諸学説、等々だと思われる。

したがって、社会的総資本の再生産に関する考察は、第二篇(部)と第三篇(部)第一〇章とで異なる視角から論ずる構想があったということになる。

再生産論に関する以上の叙述プランは、ノート第二二冊(一八六三年五月)における蓄積過程の考察でいっそう鮮明に示されている。

「再生産の詳細な規定はつぎの編で初めて研究されるだろう」。不変資本の再生産に関する「くわしい考察はつぎの編に属する」(MG<sup>3</sup>:二二四三)。

「総資本の剰余生産物は、労働素材・労働手段・生活手段からなっている。だから、それは剰余価値であるだけでなく、この剰余価値が再び資本として機能しうる物的形態でもある。ここでは、蓄積の単純な形態を考察する(蓄積は實際上、まだ形態的に考察される、なぜなら、蓄積は流通過程と再生産過程をともなうのみ具体的に考察されるからである)……」(同二二三七)。

総剰余生産物は、一方では剰余価値・剰余資本として現われ、他方では原料・用具など特殊な形態である。」「こ

したことは、本来、再生産過程の考察に属する」（同）。

みられるように、第二篇資本の流通過程で現実的再生産の分析を蓄積と拡大再生産についても行うプランが明示されている。後半の引用文は、蓄積過程を第一篇と第二篇でどういう角度で扱うかについての構想を示している。第一篇（部）では蓄積を単純な形態として形式的に扱い、流通篇ではそれを実体的再生産として具体的に扱う、という構想である。

ところで、再生産論初稿の冒頭では、「第三章で行うように、流通過程を現実的再生産過程および蓄積過程として考察するさいには、単に形態を考察するだけではなく……実体的な再生産（これは蓄積……をふくむ）に必要な諸使用価値が再生産され……るそのしかた」に関する契機が加わるとのべられている。さきほどみたノート第二二冊の叙述と同じ主旨である。したがって、以上の諸点を全体としてみれば、ノート第二二冊（六三年五月）の時点で流通過程篇の三章構成プランがあつたとみてまちがいないさそうである。

\* 正常な流通を前提し、「蓄積を単純な形態」として扱うというこの視角は、現行蓄積論の冒頭の視角——「蓄積を抽象的に」考察し、「蓄積過程の単純な基本形態」を分析するという視角——と一致している。なお、ノート第二〇冊（一八六三年三月）のつぎの文章も、こうした視角を示している。

「蓄積。われわれは他の場所で、総資本の再生産過程「を考察する」さい、従来どおりの規模での過程の再生産が問題である限りで、「この過程の」いろいろな契機がどのように法則的に制約されているか、そして、実際に、不変資本の生産者の剰余価値と生活手段の生産者の不変資本とのあいだで交換がどのように行われるか、等々を示した。……しかし、再生産過程が直接の蓄積過程すなわち剰余価値（収入）の資本への転化である限りでは、こうした相互関係は生じない。この場合は、剰余価値がどの商品から構成されていようとそれは潜在的な貨幣資本になる。それは「将来の労働に対する指図証である」。「貨幣形態にある資本の堆積は、決して物的な労働諸条件の堆積ではない。それは労働に対する所有権原の堆積なのである」

(同二〇三九〜二〇四〇)。

ノート第二二冊では、総生産過程の経済表が描かれている。彼は、この表を第三篇(部)の「最後の諸章のうちの一章に総括としてのせる」というプランを語っている(一八六三年七月六日付、エンゲルスへの手紙)。かつて明らかにしたように、この最後の諸章の一つとは、一月プランの第三篇第一〇章「総過程における貨幣の還流運動」だと考えられる。

したがって、再生産過程の分析に関する限りでは、七月時点でも一月とほぼ同じ構想が維持されていたとみてよい。

## 二

再生産論を資本の流通過程篇の第三章と指示している最初の叙述は、多分、第一部第六章の草稿『直接的生産過程の諸結果』のなかにあるつぎの一文である\* (ゴシツク―水谷)。

\* この原稿は、M・L研究所『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』第二巻にアドラツキー編として、ロシア語とドイツ語の対訳で公刊された。*“Erstes Buch, Der Produktionsprozess des Kapitals, Sechster Kapitel, Resultate des unmittelbaren Produktionsprozess”* (1933, *Moskva*)。訳は岡崎訳(大月文庫)と向坂訳(岩波文庫)とを利用した。

「注意。プルドンに関するこの箇所全体は、**第二部第三章** (C. III. Buch II) かもっとあとにおく方がよいであろう」(二二七)。

「非生産的消費となるように規定され……、再生産過程のためにはなんら使用価値をもたない生産物」。「(これらの生産物は、物質代謝によってのみ、再生産的使用価値との交換によってのみこうした使用価値をうることができる)。

だが、このことは単なる転置にすぎない。どこかでこの生産物は非生産的に消費されねばならない。非生産的消費過程に入る他のこうした物財は、必要な場合には再び資本として機能しうるであろう。このことに關する詳細は、再生産過程に關する第二部第三章に属する。ここではあらかじめつぎの注意だけをしておこう。すなわち、奢侈品生産の限界について資本家的生産者自身の立場から筋の通った言葉をはくことは、普通の経済学には不可能なことである。だがこのことは、再生産過程の諸契機が正しく分析されれば、きわめて単純明瞭になる」（一四〇）。

『諸結果』の執筆時期は一八六四年の春ごろと推定できる。それは、つぎの諸点を総合して考えれば明らかである。

（イ）同草稿が一八六四年のすかし入りの用紙で書かれていること。<sup>(2)</sup>

（ロ）同草稿は第二部初稿より以前のものである。このことは、右初稿で、「第一部第六章からつぎのことを繰り返さねばならない」（訳一四頁）とか、「第一部第六章ですでに明らかにしたように……」（訳二六五頁）と記述されている事実から明らかである。そして、右初稿の書かれたのは一八六四年秋まえである（この点後述）。

（ハ）同年一〇月以降には、すでに第三部第一章が書き始められていること（後述）。

（ニ）第一部草稿は六三年後半から執筆が続けられ、その暮れから翌六四年二月末まではマルクスの大大陸旅行で中断されていた。<sup>(3)</sup>六四年四月一九日には、仕事の再開を告げるエンゲルスへの手紙が書かれている。また、五月二六日には、エンゲルスへの手紙で原稿の「仕上げをしなくてはならない。……比較的困難な論題を取扱うために僕がしなければならぬ大決心……」と書かれている。そして、直接的生産過程の諸結果に關する問題は、すでに二三冊ノットで解決ずみの問題であり、右の手紙でいわれた「比較的困難な論題」とは考えられない（この難問とは生産価格の

形成機構の問題ではなからうか。とすれば、この論題以前に『諸結果』が書きおえられていたことになる。

現実的再生産の研究に、初めて「流通と再生産」という表題と各節題（構成）とが与えられたのは、第二部第一稿（第三章）である。

エンゲルスは、第二部への序文で、この初稿の執筆時期を一八六五年または六七年と推定しているが、それは六四年とみて間違いなさそうである。

新メガ編集者ウィゴツキーら四人は、第三部草稿が第二章（篇）↓第一章↓第三章の順で執筆され、第二部初稿は第二章以後のもので、第四章の途中でそれを中断して書かれたと考証している。<sup>(4)</sup>

第二部初稿が第三部第二章以降のものだという根拠は、右第二章草稿の一六四ページに、流通時間が利潤率に及ぼす影響の問題を「ここで詳細に研究しないでおく（というのは、この問題が特別に考察される第二部はまだ執筆されていないからである）」と書かれている点に求められている。<sup>(5)</sup> 大谷楨之介氏の推定も同様である。氏は右の根拠に加えて、同草稿一八二ページで「市場の概念は、その最も一般的なかたちでは、資本の流通過程についての篇で展開されねばならない」と書かれ、このことが第二部初稿の第一章で実現されていると指摘されている。<sup>(6)</sup>

大谷氏は、第二部初稿が第四章を中断して書かれたというさきの推定をいくつかの論拠で否定され、それが第四章以前（第二章以後）のものだと主張されている。<sup>(7)</sup> 詳論できないが、それは正当な見解といつてよい。

わたくしは、第二部初稿は第三部第四章以前はもちろんのこと、第一章以前に書かれたものではないかと考える。理由は三つある。再生産過程における排出物の利用問題は、同初稿の実体的再生産（第三章）で扱われるプランが示され（訳四六）、実際にもそうなっている（訳二八四）。同じくノート第二二冊でも、それは実体的再生産で扱われ

ている。<sup>(8)</sup>これに対して、第三部草稿では第一章で扱われている。つまり、排出物の問題は、初めは再生産論に所属させられていたが、あとで現行のように第三部第一篇（第五章第四節）に属させられたのである。そして、このことは第三部第一章が第二部初稿以後のものであることを意味する。これが第一の理由である。

第二に、第三部第一章の冒頭の文章が、第二部第三章をすでに前提したように書かれているからである。「すでに、み、た、よ、う、に、全、体、と、し、て、考、察、さ、れ、た、生、産、過、程、は、生、産、過、程、と、流、通、過、程、と、の、統、一、で、あ、る、こ、の、こ、と、は、流、通、過、程、を、再、生、産、過、程、と、し、て、考、察、し、た、さ、い、に、（第、二、部、第、四、△、三、？、▽、章、）詳、し、く、論、じ、た、」<sup>(9)</sup>（傍点と△三？▽は水谷）。

第三に、第二部初稿では第三章の末節で第三部への移行を論述するプランが示されていたが、実際には第三部の冒頭でのべられている。

以上の諸点を総合してみると、第二部初稿は、第三部第一章に先立って書かれた可能性が大きいように思われる。

以上の推定が正しいとすれば、第二部初稿は一八六四年一〇月以前に書かれたことになる。というのは、第三部第一章が同年一〇月から書かれたことが立証されているからである。<sup>(10)</sup>さきほど考証したように『諸結果』が同年の春ごろのものとすれば、同初稿は、六四年春以降から一〇月までのあいだに執筆されたとみてよいであろう。

なお、第三部第二章のあとに第一章が書かれたという既述の推定根拠はきわめて有力である。だが、第二章冒頭には第一章を前提した書きかたもみられる。<sup>(11)</sup>最終的な判断をするには、より多くの傍証が必要であろう。

ところで、第三部冒頭の叙述では、再生産論について「第二部第四章（IV Buch II）」と書かれている。これは第三章の誤記だろうか、それとも四章構成のプランがあったことを示すものだろうか？

たとえば、後者を肯定する一見解は、<sup>(12)</sup>第一章商品資本の形態規定・第二章資本の流通・第三章資本の回転・第四章

流通と再生産・という構想を想定している。その論拠は、第二部初稿では商品資本の形態規定が「資本の流通」と區別して「四循環の統一」後におかれており、その論じかたに一種の「迷い」を示す文章がみられる、という点に求められている。

その文章とはつぎのものだとされている。「いまやわれわれは、資本の流通の第二段階、 $W' - G'$ のところにきた。本来なら（われわれはまず、生産過程の結果としての $W'$ から始め、そのあとで初めて、全循環 $G - W - W'$ を回顧的に特徴づけるのでなければならぬ）のだから、ここで商品資本、貨幣資本について詳論すべきことを持ちだすべきなのであろう。しかし、それはやはり最後に行うことにしよう。つまり、資本の流通を表わす異なった流通諸形態……を前もって……分析し終えたあとで行うことにしよう」（訳三六～七頁）。

右の文章は、第二部第一章の内部における商品資本の規定のしかた・論述位置に関するものである。そこから直ちにこの問題を一つの独立章とし、第一章を二つの章に区別する構想がみられるとはいえない。つまり、この文章をそういうプランがあったことの直接の証固とするわけにはいかない。

それに、いま明らかにしたように第二部初稿は「第四章」の記述（第三部第一章の草稿）直前のものである。この点に間違いがなければ、それは当面の問題にとつてほぼ決定的である。なぜなら、問題の「第四章」の記述は、内容的にはすでに書かれた第二部の再生産論への参照指示になるからである。つまり、第四章は三章の誤記ということになる。

理論的内容からすれば、第二部は基本的には三つの部分からなっており、実際にこの区分（三章構想）は第二部初稿以前から存在していた。そして、第八稿にいたるまで維持されている。仮に四章構想があったとすれば、より明示

的にそのことをのべた叙述があるのが自然であろう。しかも、その構想が第三部の冒頭文を書いたときだけ存在してすぐ否定された、というのもきわめて不自然といわねばならない。

こうした諸点からすれば、「第四章」の記述は「第三章」の誤記である公算が大きい。

つぎに、再生産論初稿の末尾にある第三章に関する叙述プランをみておく。

「したがって、この第三章の項目はつぎのとおりである。

一 流通（再生産）の実体的諸条件

二 再生産の弾力性

三 蓄積、あるいは拡大された規模での再生産

三a 蓄積を媒介する貨幣流通

四 再生産過程の、並行、上向的進行での連続、循環

五 必要労働と剰余労働？

六 再生産過程の攪乱

七 第三部への移行」（二五〇、訳二九四頁）。

このプランと初稿の構成とをくらべてみよう。まず、「1）資本と資本との交換、資本と収入との交換、および不変資本の再生産」・「2）収入と資本、収入と収入、資本と資本（それらの交換）」——この二節が一括され、表題も「流通（再生産）の実体的諸条件」と改められていることがわかる（この方が問題の核心を正しく示しているといつてよい）。

貨幣流通については叙述中でつぎのプランが示されていた。

「最終的な叙述では、この第一節を、(1)総生産過程における商品流通の現実的素材変換、(2)この素材変換を媒介する貨幣流通、という二つの部分に分離した方がよいであろう、いまそうなっているように、貨幣流通を考えに入れることは、たえず展開の脈絡を破ることになるからだ」(訳二三頁)。

さらに、「4)蓄積を媒介する貨幣流通」が独立の節から「第三節蓄積」の小項目とされた。

「必要労働と剰余労働」の項目には疑問符がつけられ、この取扱いに迷いがみられる。

また、「第三部への移行」の論及を最後に行うプランが付加されている。

以上の相違があるにしても、双方に大きなちがいはない。しかし、既述したように、このプランや初稿にくらべて第二稿・第八稿とのあいだには大きな相違がみられる。

### むすび

以上にみてきた再生産論の確立は、『資本論』の叙述プランにとってどういう意義をもっているだろうか？ 換言すれば、再生産論の成立はいわゆるプラン問題に対してどういう意義をもっているだろうか？ いま、この問題をくわしく論じているゆとりはないので、むすびをかねて一言ふれておきたい。

『要綱』は「資本の一般性」を分析するさいに、すべての諸資本を一つの資本＝資本一般と規定し、多数の諸資本の関係は競争に属するものとして排除していた。だから、社会的総資本の再生産過程——個別的諸資本の循環の絡み合い——の分析は除外していた。

ところが、『資本論』の第二部初稿では再生産論が扱われている。その初稿にはつぎのような注目すべき叙述がある。

「……それ自体として孤立させられれば、こうした再生産過程はただ形態的なものにすぎない。現実の再生産および流通過程は、ただ、多数の諸資本の、すなわちいろいろな産業の諸資本に分裂している総資本の過程としてのみ把握されうる。したがって、これまでの考察方法とちがって、現実的再生産過程の考察方法が必要なのであるが、それは、この部の第三章で行れる」（訳五九頁）。

「流通過程では、われわれは、資本が通過する諸変態に注目するのであって、それ以上立ち入ってそれらの諸条件を気にかけることをせず、また生産過程と同様に、ここでもわれわれは、もっぱら資本一般を代表する特殊的一資本だけにかかわりをもつものである。ところが、現実の再生産過程の考察では、事情が異なる。われわれははじめから、個別的一資本ではなくて社会の総資本をその運動において考察しなければならないという困難にであうのである」（訳二四九頁）。

「われわれが、一つの資本の生産物だけを考察していた最初のところでは、△十頁はこの一つの資本の生産物の特殊の構成部分として現われたのにたいして、それらは他方、再生産過程では、特殊な自立的諸資本の、多くの生産部門を包括する一つの大量の特殊の生産物、自立的生産物として現われてくる、……」（訳二五〇頁）。

右の引用文を、『要綱』における一つの資本、多数の諸資本の排除という叙述と比較すれば、そこに、対象の叙述方法に関する一大転換をみることができる。だから、『資本論』の再生産論（初稿）は、『要綱』の既述した叙述の方法なりプランなりの変更を明示しているといつてよい。

剰余価値の生産は、すべての資本に共通する最も本質的な事柄である。だから、それを純粹に分析するには、さしあたり諸資本を一つの資本として扱い、諸資本内部の区別は捨象しておかねばならない。流通過程における資本の基本的形態規定を究明するさいも同様の手続きが必要である。こうした考察方法は現行『資本論』でもそのまま妥当する。たとえば、第一部の剰余価値の分析や第二部の第一、第二篇のばあいがそうである。

したがって、「資本一般Ⅱ一つの資本」という方法は、以上の点では不可欠で正しい方法である。しかし、社会的総資本による相対的過剰人口の形成機構や、社会的総資本の再生産の実体的諸条件を分析するさいには、こうした方法は不都合になる。そのばあいには、総資本Ⅱ個別的諸資本の運動の総体、として扱わねばならない。

資本の本性を分析するばあい、資本一般Ⅱ一つの資本と規定し、特殊的、個別的な諸資本の関係をすべて排除するという叙述方法では、社会的総資本の運動はごく抽象的にしか扱えない。その内的機構の分析はほとんどあとまわしにされることになる。したがってまた、展開中にたえず重複を余儀なくされてしまう。

『資本論』は、対象を「資本の一般的性格」または「理想的平均における資本主義社会の経済的運動法則」と規定し、右の対象分析の必要に応じて諸資本相互の関係を扱う方法をとっている。この方が以前の方法よりも明らかに優れている。

マルクスは、最初、再生産論に関する問題を「資本一般」をこえた多数資本の関係の分析に属するものと考えていた。しかし、それは個別の商品の三つの価値区分が社会的総資本にとっても妥当するかどうか、またどう妥当するか、という根本的な問題であった。だから、この研究の進展を一契機として、『要綱』の論述方法の不十分さが明らかにされていったと考えられる。

『資本論』は、『要綱』で除外されていた多数の諸資本の関係を扱うだけでなく、除外されていた土地所有と賃労働をも分析している。『資本論』から除外されたのは、これらの具体的で歴史的な諸形態に関する特殊研究である。<sup>(14)</sup>

『資本論』は、これらの説明を通じて行われる資本の一般的分析であり、したがってまた、三大階級の基本的な経済的諸条件の分析でもある。これらの諸契機が組み入れられたのは、彼がのべているように、そうしないと資本の一般的分析が不完全になるからである。こうした点でも、『資本論』の叙述方法は『要綱』のそれよりすぐれている。

両者は、ともに資本の一般的本性を究明している。しかし、双方には叙述方法と叙述プランの点で重要な転換がみられる。それは、個別的諸資本の相互関係をすべてあとまわしにする方法を放棄する一方、多数資本の関係・土地所有・賃労働等を組み入れて展開する方法への転換である。

この転換は、当初の六部作プランが現行の四部作に変更されたことと結びついている。この四部作構想の最初の記述は、『直接的生産過程の諸結果』（一八六四年三月―五月下旬）にみられる。

「だが、このような総生産物と純生産物との区別には伝統的に種々の混乱した観念が結びついている。このことは一部分は重農学派（第四部<sup>ア</sup>参照）、に由来し一部分はA・スミスに由来している……」（前掲一五〇）。

だから、『諸結果』では、第二部第三章（再生産論）と第四部とへの指示が同時に行われているわけである。多数資本の諸関係・土地所有・賃労働を扱うことで資本の一般的分析を十全なものにしようという構想が、同時に、学説史的な考察を第四部として独立させる構想をうながすことになったのであろう。そして、前者の構想を成立させるうえで、再生産論の研究の前進が、既述の点でひとつの重要な役割を果たしたのである。

以上で明らかにした叙述の方法とプランに関する変更は、『要綱』序説の経済学の篇別に関する基本的な見解の変

更を意味しない。資本は他の五項目を規定する要因である。資本の分析によって、資本と他項目・他項目間の関連を体系的に究明すべきである。こうした方法あるいは「序説」での考えかたが変更されたわけではない。

- (1) 拙論「マルクス経済表の研究」(『立教経済学研究』第三五巻第四号(一九八二年三月))  
(2) この点は、ヴィゴツキーら四人のつぎの論文で明らかにされている。

B. Выходский, Л. Мисьяевич, М. Терновский, А. Чепуренко, О нерушимости работы К. Маркса над «Капиталом» 1863—1867 гг., «Вопросы экономики», № 8, 1981. 101—112 с.

- (3) 一八六三年二月二日付および六四年二月二五日付、エンゲルスへの手紙。

- (4) 前掲ヴィゴツキーら四者論文、一〇四頁。

- (5) 右同、一〇四頁。

- (6) 大谷禎之介『資本論』第3部第1稿について(『経済志林』第五〇巻第二号、一三二—一三頁)。

- (7) 前掲大谷論文、一二三—一二二頁。

- (8) MG II<sup>3</sup>、二二五三頁。

- (9) 前掲大谷論文一〇六—七頁。

- (10) 第三部第一章一三五ページには、マルクスによる「一八六四年一〇月のいま、新しい恐慌」という注意書きがある(前掲四者論文一〇五頁)。

- (11) 佐藤金三郎『資本論』第三部原稿について(二)、『思想』一九七一年六月号一〇六頁。

- (12) 「第四章」という記述は大谷氏の調査でも明らかにされている(前掲論文、一〇六—七頁)。氏は、これを第三章の誤記だろうといわれている(同、一〇七—八頁)。

- (13) 清水耕一「資本循環論と商品資本」(同志社大学『経済学論叢』第三二巻三・四号九九—一〇一頁)。

- (14) KI・五六五、K III・六二八頁。

- (15) ノート第一五冊原九三五(MG<sup>3</sup>/<sub>4</sub>、一五二二)。

本稿は、昭和五九年度文部省科学研究費総合研究「スタグフレーションに関する総合的基礎研究」の一部である。

一九八四・七・六